

今日は、東京教区の皆さんが共に集り、心をつにし、祈りの時がもてることをたいへんに嬉しく思います。もちろん、毎週の礼拝でも各教会で礼拝が捧げられているわけですから、心をつに集められているわけですが、こうして目に見える形で多くの兄弟姉妹が一堂に会せることは格別です。

じつはとても晴々しく嬉しい気持ちでいます。説教の準備段階ではたいへんに気になる人がいますという語りだしでした。仮にAさんとしましょう。Aさんはさまざまな理由から仕事を失い、家を失い、家族を失い、独りぼっちで教会に来ました。とても働き者です。そして優しい人です。寂しがり屋で、人懐っこくて。

一人で草むしりをし、やがて教会のみんなとも親しくなりました。定職に就けるようにと多くの信徒が心配しました。しかしなかなか思うようには進みませんでした。もちろん全員が受け入れたわけではありません。時には奇異な目で眺めたり、傷つけた言動もあったのではないかと思います。傷つきやすい彼はちょっとしたことを気にして、そのたびに関係が断絶しました。しかし熱心な信徒が何度も彼の住まいとしている場所を探し出しては連れ戻して、ようやく生活保護を受けられるようになりました。生活保護を受けられ、携帯電話も持つことができ、アパートも見つかりました。そして何度も教会に奉仕だといってきたっていました。

それがぷつりと連絡が切れてしまったのです。変な仕事に巻き込まれてまたどうにかなってしまっ
てはいないだろうか、住まいはどうにかなったけれども人間関係を構築するのはとても繊細な彼ですから、またどこかの家の陰で震えているのではないか。もっといいに、彼のために教会がホームになりえなかったのではないかと思っていました。イエスが福音書の中で必死に願い、また私たちに求められていることはなにか。言い換えれば教会の宣教とはどうしたらよいか、福音を実現するとはどういうことであったのかを考えさせられています。

そんな折、「元気だよ」と言って訪ねてくれたのです。それも冷たいお茶を買ってきてくれて。だから嬉しくて嬉しくて。ほんとうにおいしいお茶でした。決して神はお見捨てにはならない。安心していいのだと。

キング牧師の有名な説教の一節にこんなくだりがあります。「私は夢を見るのです。いつの日か、ジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の息子たちと、かつての奴隷の主人の息子たちが一緒に兄弟愛というテーブルにつくことになるであろうことを。」すべての人が一つのテーブルにつくこと。夢の食卓の実現のために、私たちは行きつ戻りつする現実の中で苦悩し苦勞しています。

前段の話の中に出てきたAさんのことでは、教会の中でさまざまな議論がありました。いろいろな人がやってきます。私たちも思い通りに働いてくれる人、働かない人。助けられることを当然と思う人。あたりまえのようにやってくることで、いつしか良いホームレス、悪いホームレスという枠組みを作ってしまうこともありました。

自分の思い通りに物事を進め、自分の枠組みの中で助けられることを享受する人は良いホームレス。働きもせず、うそばかりつく人は悪いホームレス。しかしAさんはとても優しいのです。わけへだてをしません。生活保護の身でありながら、うそばかりつく、いわゆる我々の枠組みの中では括弧付きの「悪いホームレス」にお小遣いをあげるのです。教会の人が善意でくれた洋服をわけてあげるのです。

教会の人はそれが不満でなりません。時にはイライラしました。しかし今思うとイエスの姿そのもの

のように思えてなりません。イエスは荒野で何度も多くの人々と食事をしています。ほんとうなら身づくろいをし、手を洗い、身を清めて一つの食卓につくようにと定められていた。しかし山の上で、手も洗わずに、そこに座りなさい。そしてあなたたちの手で、あなたたちに与えられているものを分かち合いなさいと命じました。自分とこの人とは異なるという思いを超えさせようと、何度も何度も食事をされるのです。

そのためにイエスは何度も時の社会の中心にあった人々から中傷を受けます。批判もされます。なんであんな奴らと一緒に食事をするのだ。そのたびにイエスはその批判をかわされます。そして自分が傷つくことを恐れませんが、イエスは自分が傷ついても、すべての人が、一人も取り残されることなく排除されず、縁を切らないぞと絶対的な力をお示しになっています。

今日選ばれている旧約日課はエゼキエルの預言ですが、神はバラバラになってしまった人々を必死に探し出し、世話をしようとしていると伝えています。神はバラバラになっていくことを悲しまれています。神さまの思い通りにお勤めをし、捧げ物をし、掟を守るものだけを自分の羊だとして可愛がることはなさいません。

そしてどんなところで震えていてもそれを探し出してくださるというのです。神の仕事、イエスの仕事は完結していません。人間の罪深い行動が人々を分かち、その夢を打ち砕いているからです。自分だけがよくなることを望み、神の思いとは異なった行動をしてしまう。お前はこの場にふさわしくない、ふさわしいと断絶をつくっていく。この場所で夢が実現しつつなってきたなと思うと、他の場所で破れが生じてくる。ここを修復すると、今まで大丈夫だったところにひびが入る。それが今までの歴史であり、これからの課題かもしれません。

3月11日の震災、大きな悪魔の手が地を揺るがし、大水は家を飲み込み、人々をバラバラにし、前日までであった楽しい語らいも家庭も一瞬のうちに取り去ってしまいました。私もいくつかの被災された場所に行かせていただきました。

杳然とするしかない。立ち尽くすしかない。元のようにしていくためには膨大な時間とエネルギーが必要になっていくことでしょうか。しかし神も共に働いてくださっているのです。神はこの自然の驚異に怯えて、バラバラになってしまった人々をまた一つに集めようとされています。家は元のように戻るかもしれないけれども、失われたものは元には戻らない。お金さえあれば物質的なものは元に戻る。しかしもはやどうしようもないではないかというしかないような現実の前に立たされています。

今日もこの礼拝の後で報告がなされると思いますが、無力さを感じ、絶望感と必死に立ちむかいながら多くの人々が戦っています。詩篇で「神は、敵の見ていない前でわたしの前に食卓を整え」とあります。神は絶望の淵に立たされている私たちに希望を与えるために、食卓を整えてくださっている。杳然と立ち尽くす私たちに、少しずつでもいい、立ち上がることができるようにと準備してくださっているのです。今日のフェスティバルのこの食卓は神が用意してくださった希望の食卓です。私たちは弱く小さく、ちょっとしたことで壊れてしまう存在です。罪深い存在です。しかし神によって与えられた希望によって雄々しく立つことができます。

いつもイエスが一緒に居ることを実感できたなら強くなれるのに。多く人はそう感じているかもしれませんが。ルカの福音書の最後にお弟子さんたちが、昇天していったイエスを見送った後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて神をほめたたえていたとあります。寂しくなかったのか、不安ではなかったのか、私は少し違和感を覚えます。

なぜ彼らは平気だったのか。イエスが地上での生涯の終わりに「これだけはしっかりとつかんでおきなさい。」と宣教のわざを託すべく弟子たちに言ったことは何だったのでしょうか。

これだけは忘れてはならない点は、罪の赦しを得させる「悔い改め」ということです。悔い改めは多くの祝福と恵みを与えてくれます。神様に自分の罪や弱さを告白するのです。「私はそのような者でした。愚かな者でした」と告白すると解放され自由になっていきます。自分を変えられていく恵みをたくさんいただけます。

『聖書を悟らせるために彼らの心を開いて』とあります。じつは素晴らしい神様の真理、御言葉も神様が心を開いて正しく受け取らせていただくのでなければ、あまり意味も力も持たなくなってしまうことがあるのです。「悔い改め」とは、神様の大きな愛に触れて自分の間違いに気づき「ごめんなさい。ほんとうにあなたの元に立ち返って来ます」と心を変えていくことなのです。

でもそれは「大きな愛に触れて」です。怒られてとかいじめられてではありません。本当に酷いことをたくさんしてきたにも関わらず一切責め立てず「それを赦す」と言って下さっています。「もうお前なんかダメだ。お前なんか死ぬしかない」と言われても仕方がないのです。それにも関わらず神様は忍耐して期待して下さるのです。「あなたはいつか神さまのために役立つ時が来るのだから」と待っていて下さるのです。この神の愛に触れる時、私たちは「イエス様ごめんなさい。あなたに従っていきます」という気持ちになるのではないのでしょうか？

イエスは「わかっているよ。そのためのすべての責めは私が十字架で受けたのだから安心しなさい」といつも赦し励まして下さるのです。このイエス様の十字架を見上げ、赦しを覚えて立ち返っていくのです。イエス様は『すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます』(マタイ11章28節)と言って下さっています。

私たちにはできないのです。こんな私たちにイエス様は「それでいいのだよ。私のところに来なさい」と言って下さり、それにより罪の赦しをいただくことができるのです。このことが第一です。「どうせ私はダメなんだから仕方がないでしょう」。これではほんとうの意味で神様の愛に触れることはできません。私たちに居直った心があるのであれば、イエス様の言葉通り『聖書を悟らせるために彼らの心を開いて』と「私の心を今開き、この事が分かるようにして下さい。神様の愛が分かるようにして下さい。こんな酷い私ですが、もう一度やり直し立ち上がらせて下さい」と神様の元に立ち返るのです。何度失敗しても、また神様の元に立ち返ってくるのです。これが第一に私たちが、いつでもどんな時でも忘れてはならない信仰の秘訣です。

今日の福音書は大祭司の祈りと言われる箇所、イエスの告別説教の最終部分のまとめの祈りです。イエスは弟子との別離を前に執り成しの祈りを行います。数時間後に、イエス様を裏切る弟子たちを、なおも愛して、神に願うのです。それは、彼らが将来イエスを真に知って、輝く人生を送ることを祈っています。イエスはこの弟子たちのために祈りましたが、今、私たちのためにも祈っておられます。守ってください(11節) 喜びを満たしてください(13節) 雄々しくこの世に福音を生きる者としてください。愛の交わりのうちに一つとなり、すべてを満たして神の輝き、栄光のうちに生きる事ができるようにしてください。

この祈りに支えられ弟子たちは喜びに満たされ賛美の日々を過ごしたのです。執り成しは聴かれた。神の言葉は実現する。昇天後の弟子達の反応はそのことを示しています。そして今日、私たちは素晴らしい事実を知ります。イエスは弟子たちのために執り成しただけではありません。彼ら(弟子たち)の

ためだけでなく、彼らの言葉によって私（イエス）を信じる人々のためにもお願いします。（20節）

イエスはこう祈ります。私のためにも祈ってくださる。私たちのために、あの時も今日この時も、将来もいつまでもこのように神に執り成してくださる。イエスの祈りに包まれて私たちは生きている。教会が宣教し、イエスを信じるようになった一人一人のために祈ってくださる。神とイエスとの愛の交わりの中に加えられる。神様の愛の深さ大きさを感じる事ができるようにしてくださるのです。一人で頑張ろうと思ってもなかなかできません。努力に努力を重ねても壁にぶちあたります。ちょっとした困難で挫折します。

しかし神の栄光の輝きを与えられた人、神の愛を知っている人は勇気百倍です。しっかりと抱きとめられていることを知っている人は雄々しく立ち上がる事ができます。そしてこの世で神のみ心を生き、イエスが語ったように語り、行ったように行い、祈ったように祈ってすべての人を救いへと導いていくのです。私たちは神から与えられた使命を果たすためにまず神の愛を感じましょう。その愛をしっかりとつかんで、その喜びをもって神を賛美する日々を過ごしましょう。

イエスは、神との愛の関係のような一致を、弟子たちの間でも実現してほしいと願いました。キリストのからだである教会を離れ、去ってゆく人がいます。キリストのからだの一致を壊さないために、気をつけることとはなんでしょう。

テトス3：9「しかし、愚かな議論、系図、口論、律法についての論争などを避けなさい。それらは無益で、むだなものです。」キリストのからだである教会を輝かせなくするもの、それはさまざまな論争、議論による、不一致から起こりやすいのです。そして心の平安が崩れます。

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい」（コロ3：15）人間同士の足りない部分だけに目を留めず、その足りなさゆえに、自分の無力さを悟り、キリストの十字架に焦点をあてるのです。

私たちのなすべきことは、「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」（ローマ15：2）私たちは光の子とされました。暗闇にあって、輝くものとされたのです。悪魔と悪霊たちは、光の子になったものが、光を放てないように努力するのです。信徒の戦いは、この目に見えない敵との戦いです。イエスは、私たちがこの戦いに勝てるようにと、背後で祈って下さるのです。

人の罪は良く見つけるし、指摘できるのですが、自分の罪に鈍く、甘い、自分の姿があります。輝く人生のためには、これを変えられていく必要があるのです。そのためには、毎日、キリストとの親しい交わりを欠かせません。信仰の成長と祝福のために、み言葉をたくさん食べて、主イエス・キリストの愛をもっともっとうたぎらしましょう。今、それが準備されていることを感謝します。

輝く人生の土台は、神のみ言葉からすべてが始まるのです。神の定めてくださった主の食卓に集い、み言葉に養われ、御体と御血によって強められていきたいと思えます。皆さんが、罪の世の中で、暗闇に輝く、キリストの愛を反射させるような輝く人生を求めて生きていってくださることを求めます。神の子とされて、戦いを勝利していくことを求めます。

イエスは神に信じる者のために祈ってくださっていることを信じて立ち上がりましょう。